魔法先生ネギま！　デウス・エクス・マキナ＜機械仕掛けの神（笑）＞

狂皇リィラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま！　デウス・エクス・マキナ＜機械仕掛けの神（笑）＞

【Ｎコード】
Ｎ９９３９Ｏ

【作者名】
狂皇リィラ

【あらすじ】
中途半端な能力を持っていた人間が神の運命に逆らい、神となる資格を得た。そんな彼に機械仕掛けの神になってみないかと発明家エジソンに誘われた。彼は機械仕掛けの神になることにし、新たな人生を研修期間を終えて、ネギま！の世界にて始める。
※作者は原作知識がちょっぴり乏しい＋処女作です。不快になられる方もいると思いますのでそんな方はどうぞお戻りください。

起動！（前書き）

処女作及び原作知識乏しい私が書く小説です。
内容が気に入らなければどうぞ「戻る」ボタンをカチッとしてください。
そんなものでも「おk」という方はどうぞ

起動！

中学三年生……進路、いってみれば将来が決まる学年である言える時だ……

勉強……？理解は早いが、忘れるのが速い。人の顔と名前もすぐに忘れてしまう。

運動……？人並みには出来る。やる気があればクラスで一番が取れる……。

かなり中途半端な能力を持って生まれてきて、やりたいことも恋もできずに生きてきた。

そんな俺が人生でたった一度の有意義な死を迎えた……

学校に立てこもったテロリストが逆上して俺を含めた生徒を巻き添えにして死のうとした……

手榴弾を手にし、ピンを引いたテロリストに突っ込み、窓から一緒に落ちて爆死した……

しかし、不思議と意識がある。それにここはどこの研究室だ？と思うような機材が並んでいる。

ＲＰＧのゲームでもやっているかのようだ。

「や～、君がある意味不幸で幸運な魂か」

ほっそりとした力のなさそうないかにも研究員みたいな格好を

した人がいる。

「ここはどこですか……？」

普段の言葉遣いはもうちょっと荒っぽいけど初対面の方や目上の方には言葉を選ぶ。

ちょっとした常識なら持っている。

「ご丁寧な言葉遣いどーも。えっと、君はテロリストを道連れにしたわけだけど……」

顔を伏せて笑っている姿は実に奇妙だ……

「失礼ｗｗ。コホン！君は非常におもしろい。神に定められた運命に抗ったんだから」

「どういうことですか？」「敬語はいいよ」

「どういうことだ？」

それでいいんだよ、僕は本当の君が見たいんだ……そういって眼鏡を上げて視線を鋭くした。

「人はそれぞれ与えられた運命と人格がある……」

「そういう話はよく聞く。これでも神話や悪魔には詳しい……」

「では、私のことも分かるかな……？私の名前はエジソン」

「馬鹿な……エジソンはもう死んでるし、人間のはずだ」

「死んでいることを行ってしまえば君だって死んでいる。まぁ、話を聞きたまえ」

「さっきも言ったように灯には運命と人格がある。だが、稀にそれに逆らう者がいる。例えば私だが、私が何回も失敗したことは知っているね？」

「もちろん、貴方は有名だ。失敗しても成功だとも言う……」

「懐かしいね、そういう時もあった。話を戻そう。私はあのまま失敗して人生を終える予定だったしかし……」

「成功してしまったと……」

「そう、そうした者達は神となる資格を得ることが出来る。望む形で生まれ変わることが出来る」

何かを企んだ様にニヤリ……と笑みを浮かべたその顔に背中がゾクっとした。

「この私が作った最新型の機械になってはみないか？」

「何？」「私の作った機械に生まれ変わってみないかと言ったのだ」

「要は実験台になれと……？」「違う、もう既に完成している。テストもバッチリだ」

ならば、なぜ機械に生まれ変わる必要がある？と聞きかけたが……

「問題が一つ発生してね……暴走したのだよ……」

「いいよ……」「ハ……？」

年食って耳でも悪くなったのだろうか……？

「面白いね、その話乗った。ただし、条件がある」

「なんだね？」「今から希望したとおりにしてくれ……」

「そのくらいお安い御用だよ……」

お互いに笑みを浮かべて条件を話した……

数分後、目の前には希望通りの機械が立っていた。

「この機械の構造はほとんど人間と変わらないから、いつも通りの生活をしてくれて構わない。

それと、希望通りの機能をつけた。外見はリボンズ・アルマーク……ガ〇ダムが好きなのかい？」

「大好きだ、モビルスーツ全ていえる」「そ、そうか、それはすごいね」

やや困ったような顔をしているが、何か言ったかな……？

「お望みどおり、光学迷彩をつけておいた。姿、声いずれも変更可能だ。そして頼まれていた服だ。これも希望通り、君専用の倉庫になるようにしておいた。」

頼んでおいた服はキ〇グダムハーツ？の？？機関の着ていた服？ローブ？知らないけどあれだ。

後悔はしてない……。趣味を固めた機械でも後悔はしていない。

これからは自由だ！！！！！

「ちなみに神様だからしっかりと仕事はしてもらうことになっている。まぁ、まずは体を移そう」

自由じゃないらしい……

とりあえず研修習慣として一ヶ月くらい勉強させられるらしい。

出る頃には性格が変わってそうで怖い……

起動！（後書き）

原作知識が乏しいので矛盾及びおかしいところがあったらどうか教えてください。

記録ファイル…Ｎｏ．１　神、逃亡す（前書き）

前回、研修を受けることとなった機械仕掛けの神。
しかし、あまりに厳しすぎる内容で……？

記録ファイル…Ｎｏ．１　神、逃亡す

「やってられるかあああああああぁぁぁぁ！！！！」

ぼろぼろになった体で精一杯の叫びを上げたつもりだが……

書いてあるだけで、かすれた叫び声しかもはや出なかった……。

一ヶ月の研修期間、短いはずが神の国では百年らしい……時間軸がずれてる……

今はあれから三十年……下の世界などでは十日くらい……

もういやだ……こんなことやってられるか……なにが戦闘訓練だ……

こんなハイレベルな戦いやってられない……

体は機械でありながらも確実に人間に近い。痛みなども感じる。感情もある……。

相手は戦の神、こっちの世界では一万年近く神の国を守ってきた人だ……キャリアが違う……。

「こう……なったら、もう……逃げるしかない……」

機械の体がぶっ壊れてしまう前に……

「それで、僕のところへ来たというわけかね？」「そうだ！！！！！！！」

「あんなことをやっていたらいくら機械の体でも持たない！！！！」

「まぁ、相手が彼女では仕方ないね……」

「思い出させるな！思い出すだけで足が……」

これは武者震いだ……そうだ武者震いだ……決しておびえているわけではない……。

「分かったよ、彼女には研修期間の残りを下の世界での実地研修としておく……」

「本当か！？頼むから早くしてくれ……こんな所……」

「どこへ逃げるつもりだ……？」

低く聞き覚えのある声が聞こえる……その声に体は一気に硬直してしまった……

「か、体のメンテナンスを……」

「お前の体は永久機関で出来ているし、傷ついた所はナノマシンで修復可能なんだろ？」

「エ、エジソン……；w；」

「すまんが、こればっかりは……＾w＾；」

もはや、いっそ死んでしまおうか……

「ハッハ！中々面白そうだな？」「オーディン様！！！！！！」

正に神、神です。貴方は神です！！！！！

「よいではないか、下の世界での実地研修」「し、しかし、こいつはまだ……」

「セクメル、お主の訓練は少しばかり厳しすぎる。十日持ったのはこいつが始めてだ」

「そんなことはありません！あれでもまだ序の口です！！」

死にます、ただでさえ死にそうなんだぞ！！！？

「マキナ、こいつの訓練はどうだ？」「すごく厳しいです、三十回ぐらいしんでます」

ぶっちゃけ、機械の体だからついていけた。

「な！なんだと……そんなに厳しかったのか……」

どう考えても当たり前の結果に絶望に打ちひしがれるセクメル……

ちなみに、マキナとは俺のことだ。人間だった頃の名前は忘れた。

「では、そうだな……時間軸がここ以上にずれている世界にしておくか」

「となると、アニメや漫画の世界ですね……」「行きましょう、即行きましょう」

夢にまで見た展開です。アニメや漫画の世界なんて……神すぐる……あ、一応神だった。

「ちなみに言うが、お前はまだ神ではないぞ？言ってみれば……神（笑）といったところか」

なんて馬鹿にされた称号なんだ……。はやく神（真）になりたい。

「準備は出来ています！早速、向かいます！！！」

逃げるために持ってきた用具を担いだ。

「実地研修だ、もって行くのは武器と服、生活に必要最低限のものだけにしろ」

「マ、マジですか？」「心配するな、必要なものがあったら僕が送る」

主に実験用ですね、わかりますよエジソン。

「で、どうやって行くんですか？」「もちろん、落ちるのだ」

「へ……？」「慣れれば楽しいぞ？」パチン！！！

「あああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁ……」

だんだんと落ちていく中で、オーディンの高らかな笑い声を聞いた……

記録ファイル…Ｎｏ．１　神、逃亡す（後書き）

まだ、ネギま！の世界に入れなくてすみません。
次回からようやく入っていきます。
お待たせしてしまうことになり申し訳ありません。

記録ファイル…Ｎｏ．２　神、墜落す（前書き）

「む、そういえばあやつに下界への降り方を教えておらんかったなぁ」

「大丈夫です、超新星爆発でも喰らわなければ問題ありません」

「さすが、よく出来ておるようだな」

「お褒めにあずかり、ありがとうございます」

「アッハッハハ！！」「フッフッフ！！！……何か忘れてるような……」

え～、ここでお知らせをします。諸事情により主人公の外見を変えさせていただきます。詳しくはあとがきで……

記録ファイル…Ｎｏ．２　神、墜落す

なんて、二人は高笑いしているけど……

「いあああぁぁあぁぁあっぁあぁあぁ！！！！？？？」

「キャァッ！！！！」

大きナ衝撃ヲ感知シマシタ……ファイルノ損傷ヲ防グタメ、一時的ニ意識ヲ切断シマス……

……再起動シマス……

「うう、ひどい目にあった……。あんな落とし方しなくても……」

う～ん、とりあえず一言……。知らない天井だ。知っている天井なんてある訳ないが……

「あ、起きましたか……？」

腰までかかっている白い髪、頭には耳がひょっこりと生えている。

「貴女は誰ですか……？」

運動機能ニ異常ハアリマセン……。

起き上がろうとする体を彼女はそっと押さえつけた。

「私の名前はティリア・S・クエスタ……。驚きました、いきなり空から人が降って来るなんて」

「アハハ……、とにかく助けてくれてありがとう。僕は……」

神様って気軽に名乗っちゃいけないんだった……名前……名前……

「あ、あの……？」「えぇっと……。名前が……ないんです」

最終手段、乙です。記憶喪失ってことにしておこう。そうすればこの世界のことも少しは分かる筈

「落ちてきたときに強く頭を打っていたようですから……記憶喪失ですか？」

「どうやら、そうみたいです。思い出そうとすると頭が……」

痛がる振りをする。それを心配そうに話しかけてくる彼女に罪

悪感を感じてしまう……

「とにかく、しばらく寝ていてください」「いえ、そこまでお世話になるわけには……」

「いいんです、どうせ私一人ですから……」「あの、ご家族は……？」

「家族は……その」

彼女の顔が曇る、聞いてはいけないことを聞いてしまったのだろうか……

「いや、やっぱりいいです。言いたくなかったら言わなくていいです」

「家族は、帝国の研究者たちに連れて行かれました……。父と兄はこれも国のためだと……」

「少し、色々聞いてもいいですか？話を聞いている間に何か思い出すかもしれません」

「分かりました」「それでは、まず……」

この国のこと、世界のこと、帝国と連合国、各小国との小競り合い……魔法のこと……

（これだけ話を聞いても分からないってことは原作知識がない

ってことになるな……）

「ありがとうございます、おかげで少し思い出せました……。ところで、その耳は？」

「え？ああ、私は獣人族の血が流れていますから……。あなたにもついていますが……？」

「あ、これ実は髪なんですよ。昔からこの髪型が直らなくて……」

彼女の手をとり、頭に手を載せる。

「本当だ……不思議な髪型ですね」「ええ、どんな手を使っても直らないんです」

お互いに慎みながら笑う。外を見やればもう夜中……

「もう、こんな時間ですね……そろそろお暇しなければ……」

「そうですか……」

家から外を出ると、あたりには家が散らばりながら点在している。どこかの村のようだ。

「それでは、運んでいただきありがとうございました……」

「いえ、お気をつけて……」

一歩踏みしめてどこへ行こうか考えたとき、ある問題が発生しました。

「ここって、どこですかね　＾ｗ＾；」「ここはフェル村です」

どうしよう、道がわからない……見たところ山に囲まれているようだし……

「あの、今夜一晩だけ泊まって行きませんか？」

夜も老けてきた、だが、一つ屋根の下に男女が二人きりというのも……

「それに、もっとお話したいんです」「そ、そうですか、ではお言葉に甘えさせてもらいます」

気のせいか、顔も明るくなったよう……。夕食の支度をすると言って彼女は家に影に消えた……

その日、一晩床を借りた……

ティリアＳＩＤＥ

上から木の枝が折れる音がして見上げてみたら、黒い服？を着た人が降ってきた。

「だ、大丈夫ですか？」

体をゆすってみても目を開かない、死んでいるのだろうか。

恐る恐る、顔を近づけた。……よかった、まだ息はある。運べるかな……私より少し背が高いけど……

意外と軽い……。獣人族は女性でもそれなりに力があるからある程度のものなら運べる。

持ち上げた時にフードが外れた。

かっこいい……気づけば、顔が赤くなっている……。何を考えてるんだ……私は。

誰かと一緒にいたら、その人に迷惑がかかってしまう。だって、私は……。

とにかく、運ばないと……

家に寝かせておいてしばらくしたら起きた……。

話してみると、すごく丁寧に話してくれた。頭を打っていたので記憶がないらしい……。

家族のことを話そうとした、でも話すことをためらった。そうしたら、きっと……この人も……

話さなくてもよい、と彼は言ってくれた。全て話すことはでき

なかった。彼もそのことに気づいているはず、でも、追求しなかった。

男の人に初めて手を握られた。彼の髪はすごくサラサラでふさふさしてていい匂いもした。

一緒にいてはだめだと分かってる……。だけど、彼ともっと一緒にいたい。

これが好きっていう気持ちなのかな……？

明日、きっと彼は行ってしまう……。胸が痛い……。

記録ファイル…Ｎｏ．２　神、墜落す（後書き）

ちょっと、シリアスになってしまったかもしれません。
次からは笑いも取れるよう尽力します。

主人公外見変更についての詳細

髪（蒼銀の色をしており、耳のようなクセッ毛ができている。髪は長く、肩甲骨まで伸びている）

目（真っ青になっており、目の色を変えることもできる）

服（？？機関の黒い服を着ている）

記録ファイル…Ｎｏ．３　神、旅立つ

朝、一日の始まりで視界が霞み、布団から一番出たくないときだ……

思考が冴える（といっても機械だから関係ないのだが……）までの間今までのおさらいをしておこう。

まずはこの世界、この世界には平行してもうひとつ世界が存在するらしい。

現在いる世界が『魔法世界』もうひとつが魔法の存在しない世界、言ってみれば『地球』

もっと簡単に言うと、俺が人間だったころの常識が通じる世界が『地球』の方

常識が通じないのがこの『魔法世界』

その魔法世界でも国が幾つかに分かれていて、このフィル村の領有権はヘラス帝国という国がもっている。

ヘラス帝国は長年強大な力を持っている帝国で、現在はメガロメセンブリアを中心にしたメセンブリーナ連合と魔法世界を北と南に分けて小さな小競り合いが生じている。

これはいつ大きな戦争になってもおかしくないらしい……

ここには種族間の大きな溝があると言ってもいい。

ヘラス帝国は獣人や竜人、一般に亜人と呼ばれる人が多い。

メセンブリーナは普通の人間が多く暮らしている。

そんな南と北では古くから恨みや怒りが双方とも積もりに積もっている。

今、正にそれが爆発しようとしている状態。

ここ、フィロ村には獣人が多くの割合を占める。

又、特殊な魔脈、魔力が地面を通っており鉱山や洞窟では珍しい鉱石が多々埋まっており、戦艦の素材として使われているらしい。

フィロ村は古くからヘラス帝国から特別扱いされている。

この村に咲く花は魔脈のせいか毎年キレイな花が咲くらしい。

ここからは村人に聞いた話……

元々この村に住んでいる人々がおり、その人々は古からこの地に住み着いているためなのか不思議な魔力と魔法が使えたという。

しかし、その種も年々少なくなっていき今では彼女の家だけだったらしい。

その彼女の家族も連れて行かれた。研究所に……

ここだけの話、連れて行った人間は明らかに帝国の人間ではなかったとか……

黒いローブを着ていてフードを被っており……って俺みたいな服装しやがって！！！！

おかげでしきりに疑われたよ……

とにかく何か裏があるのは間違いないらしい。

たしか、戦闘以外に受けた研修で

『神の名に恥じぬ行動を、善人悪人関係なしに人々を助けよ』

っていうのを三十回ぐらい暗唱させられたな

ここは恥じない行動を……しばらくこの村にとどまって様子を見よう。

戦争が起きようものなら、俺が止めて見せよう……。

そして、彼女に火の粉が降りかかるようなら俺が払おう。

一宿一飯の恩義を返すために……

「さて、そろそろ起きよう……」

目を開いて上半身を起こす……少々、外が騒がしい……

「……何度来ても同じです、私はここに残ります。それが、父と兄を助けることになっても」

「君が協力してくれれば父上と兄上、そして君もより早くこの家に帰ってこれるのだぞ？」

「私は行きません」「……よいのか、この家にいる男がどうなっても」

早速、一宿一飯の恩義を返すときがきたようだ……。どうやら研究所の人間らしい。

「！！ッ、なぜ、それを……」「あの男に迷惑をかけたくなかったらおとなしくついて来い」

なかなか面白いことを言っている。話し合いで駄目なら脅しか……腐った連中だな……

「それならば、その迷惑とやらをかけてみろ」

「貴様が報告にあった男か、怪我をしたくないのなら下がっていろ」

「おかしいな……。聞こえなかったのか？その迷惑や怪我とやらを見せてもらおうか、と言っている」

あざ笑う様子で言い放つと五人のうち一人が奥歯をかみ締めて魔法を放つ……

「ふざけるな！！魔法の射手（サギタ・マギカ）！！！」

魔法の矢がこちらへ飛んでくる……遅い、この程度あの人に比べたら……

避けるのも面倒だ。結界で弾こう……

「ハッ！その程度で俺に怪我をさせる？寝言は寝てからな……リフレク」

魔法反射呪文を唱えると橙色の光がやさしく包み矢を弾いて消した。

文字通り、意識を落とすために相手の懐に踏み込み腹に蹴りを打ち込んだ。

「さて、お前らは何者だ……？ああ、いいんだ。何もしゃべらなくていい」

こっちが勝手に頭の中を覗くから……

「チッ！気をつけろ……かなりやるぞ」

残りの四人が抗戦体制に入ったところでフードを外す

「来い、一人ずつじっくりと裁いてやる」

短くつぶやき、戦闘開始した。

相手の四人が魔法を唱え、同時に攻撃してくる。

「やれやれ、フェアじゃないな」

もっともこのチートな神様にフェアもくそもないか……

「レディ！モードヴィクセン」

氷のいてつく学究……キングダムハーツ？出てくるヴィクセンの楯をモデルにしたチート楯を呼び出す。

ちなみにレディとはいつも右手につけているブレスレットの事（詳細は後書きで）

楯を展開、防御、その魔法を解析して三倍にして返す。そしてその魔法を学習して使用者に通達してその使用者がその魔法を扱えるようにする。

「ま、魔法が！！」「さっきよりも威力が……！」「グハァッ！！！」

一人、致命傷を避けた攻撃で倒れる……

「クソッ！！時間稼ぎをしろ！！」

一人の筆頭らしき男が言うと残りの二人が立て続けに攻撃してきた……呪文詠唱を行うらしい

楯で攻撃を吸収して一気に返してやろう……

「ケノテートス・アストラプサトー・デ・テメトー・ディオス・テュコス」

詠唱が終わりに近いのか残りの二人が攻撃の手をゆるめた。

「死んでしまったら申し訳ない。地獄の神様によろしくいっておくよ」

やられたらやり返せ、ただし、三倍でだ……

「魔法よ、持ち主の元に返れ……リターン」

地面を浅くえぐるほどの威力が二人を襲い気絶させる。生きてよかったね……。

「来れ虚空の雷、薙ぎ払え。雷の斧！！」

雷でできた斧が頭上へと現れる。相手が腕を下げた瞬間それが襲ってくる

「それがお前の最大の攻撃か……真正面から打ち砕いてやるよ」

楯で受け止めて学習する。

「では、こちらも……雷の斧」

詠唱なしでの魔法の発動に相手は驚き斧と斧がぶつかり合い、やがて、相手のほうが消えた。

「うわあぁぁあぁぁあ！！？」

殺しはしないよ、威力は抑えてる。

バチバチと感電した相手は倒れた……。まぁ、こんなものか……

「すごい……」「怪我はない？」「大丈夫」

いつの間にか敬語を忘れて話し合っている、一気に距離が縮んだなぁと思いつつ

気絶している男たちの頭を掴み、情報を引き出す。

……

やはり帝国の人間ではないらしい。そもそも、こいつらは亜人ではなく人間だ……。

『完全なる世界』そして……

「！！ッ、セキュリティか！？」

意識を弾き飛ばされ男の体は爆散した。彼女をかばっている体を起こした。

残りの人間も跡形も残らず吹っ飛んでしまった。

「分かったのはひとつだけか……」「あ、あの……」

彼女が恐る恐るといった様子で話しかけてきた。

「言いたいことは分かる。俺がいったい何者なのか、それには答えられない」

「あの、兄や父はどうなったかわかりませんか？」

「分からない、ひとつ分かったのは帝国の人間ではない、とい

うことだけ」

「やっぱり……」

「これから、俺はこの組織の人間を追ってみようと思う」

「そんな私のためにそこまで……」

「実際、それはついでみたいなものだ。もう少し見聞を広げたいっていうのもある。記憶もまだ戻っていないし……」

ただ、それだとやっぱり問題がいくつかあるな

「なにか分かったら連絡するよ……。ただ、どうやって連絡するか……」

「だったら、仮契約（パクティオ）しませんか？」

やや、顔が赤らんでいる、熱でもあるのだろうか……

「それをするとどうなる？」

ほうほう、仮契約をするとレディみたいな武器などが現れるカードが手に入るらしい。

また主従関係もあり、カードを使って連絡もできるらしい……。これなら問題ないね……

「それじゃ、早速やろう」

彼女は地面に魔方陣を書いていく……

そして二人向き合いってあれ……だんだん顔が……

「んッ、、、」「……」

魔方陣が光り、一枚のカードが出てくる。

というか……

「今、キス……した？」「は、はい／／／」

ポカーン……この体になってのふぁーすときすでした……。

恥ずかしいので話を逸らそう……

「これがカード、二枚あるからきっとこっちが君のだね」

絵が描いてあったけどよくわからないから……とりあえず、袖にしまっておこう。

「なにかあったら、すぐに連絡するよ……」

待て待て、彼女にまた同じようなやつらがくるかもしれない。

「一回も起動したことがないけど……このプログラムを使おう」

悪魔召喚プログラム起動……ヨウコソ、マキナ様

ストックしてある悪魔は……ソロモン七十二柱か……

未来が見通せるヴァッサーゴと戦いに強いエリゴルを置いていこう。

「悪魔召喚、サモン！！」

二つの召喚陣から二体の悪魔が現れた。

「わが名はヴァッサーゴ」「わが名はエリゴル」

「「主人よ、命令を」」

「よし、うまくいった。子供の姿でこの女性を守ってほしい」

「「了解だ」」

二人は闇のようなものを被った後、二人の子供が現れた。

「弟と妹みたいに扱ってくれてかまわない、二人は君を守ってくれる」

「よろしくー！！」「よろしく……」

活発なほうがエリゴルで落ち着いたほうがヴァッサーゴか、なかなかいいコンビになりそうだ。

「ありがとう、気をつけて……」「大丈夫、さっきの見たでしょ？」

「そうですね、心配する必要はないかもしれません」

「じゃ！まぁ、元気で」「元気で」

また会いましょう……

歩き始めたとき、どこへ向かおうかと思ったが、まずは帝都に向かうことにした。

記録ファイル…Ｎｏ．３　神、旅立つ（後書き）

ちょっと、展開速いな……と思っているかた勘弁してください。やりたいことが多くて作者も回していかないときついんです＾＾；

ここで武器の説明を

「レディ」

普段はブレスレット、呼びかけるとモードに対応した形の武器になる。

武器はキングダムハーツ？の？？機関を参考にしている。

今回出てきたのはヴィクセンの楯を元にした楯。

相手の魔法を吸収し三倍にして跳ね返す。また、魔法を研究、解析して使用者に魔法の使い方を教えてくれる。

正に、いてつく学究

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9939o/

魔法先生ネギま！　デウス・エクス・マキナ＜機械仕掛けの神（笑）＞

2010年11月28日22時58分発行